

三節 求道と超能力

求道の目的はミタマをみがくことである。それでは肉体人間には見ることも触れることもできないミタマを、求道者はどう把握し、どう感じ取ればいいのか？ 実体の感じられないものを相手にして、いかに神界の神をめざすと言っても、なかなか求道生活などできるものではない。そこで先人は超能力の発現ということの一つの目安にし、そこに求道の目標を置く手法を使った。

確かに異次元の世界を感じ取るには、超感覚の回路を開くことは有効な手段である。ところがこの超能力にも次元差があるということを、認識している者はあまり見受けられない。先人がその次元差の区別を、きちんと文字で現わしてくれているにもかかわらずである。

第1章 第3節 求道と超能力

現代社会で超能力（超感覚）と一括されている言葉の中には、簡単に言つて次の四種類の区別がある。まずその一つは「霊能」という言葉である。これは読むで字のごとく、霊界にかかわる超能力のことである。霊視、霊聴、霊言などというように使われる。一般人は超能力を霊能と同等のものと考えているが、そのことはほとんどの人間が超感覚にかかわりのある宗教を、霊界次元でしか見ていないということでもある。

次に「神仙術」という言葉がある。これはヨガ神仙界で使われる言い方だが、この道は超人をめざすもので、空を飛んだり、水上を歩いたり、姿を消したりなど、超能力としてはもつともめざましいもので、超能力開発ということでは、このコースの訓練法が取り入れられていることが多い。

そして、「仏法」とか「法術」と呼ばれる言葉。これは仏教用語で、信者に現世利益をもたらすための技術のことを言う。ここでは行者の能力によってさまざまに技法が使われている。霊界のものもあれば、神仙界のものもあり、もちろん仏界からのものもあり、さらには自然神の力を借りていることもある。

さらに「神通力」と言われる言葉。これは文字どおり神界の神にかかわるものではあるが、この言葉は必ずしも神界用語として正確に使用されているわけではない。神界がかかわるものとしては「神がかり」という言葉がもつとも一般的であろう。しかし、これらの言葉は霊界で使われることもあって、その場合の神は霊神かかたり神ということになる。

こうして各世界ごとで違う表現をしているように、かかわる世界が違っていると、その超感覚にも違いが出てくるのである。一般にはこれが「超能力」という言葉でまとめられ、特に現代では科学的な方面からそうした超能力開発が試みられるようになってきたために、なおさらその区別があいまいになってきているわけである。

そうした超感覚を獲得することが求道であり、修行課題であるかのように受け取られているのが、一般的な考え方ではないかと思う。世間をにぎわせているこの種の書物は、ほとんどがそうした説き方をしているし、超能力獲得法を売り物にして人集めをしているのが、新興の宗教グループの特徴でもある。しかし、超能力とミタマをみかくということは、必ずしも一致しているわけではない。確かにミタマをみかくということは、異次元とかかわって進むために、各次元とのからみでそうした超感覚が、求道者には現われてくるものである。だからと言って、異次元との回路を開くことが求道の目的ではないし、超感覚が現われることがミタマの成長に比例していると考えられることには、誤りがある。

たとえば、物質人間界にもっとも近い幽界とか霊界レベルで回路が開いたとしても。彼は幽界とか霊界にかかわるさまざまな異常現象に取り巻かれ、そうした領域に特に素質のある者は、幽界旅行（アストラトリップ）とか霊界探訪といった、肉体人間には夢のような、不思議で珍しい体験ができることになる。彼はそのことで有頂天になって、自分は有能な求道者であるという錯覚に陥り、さらにそれらの世界とのかかわりを深くしていくことになる。彼に向上心とか求道心があるとすれば、そうした経験を通してさらに前進をはかるうとするにちがいない。しかし、そのとき彼は幽界なら幽界、霊界なら霊界の次元を登ること

しかできなくなる。ミタマは眠ったままで開かれてはおらず、靈界を登るかぎりにおいては、いかに修行をしようとミタマが目覚めることはない。彼は靈界にかかわる魄をみがいているだけだからである。そして靈界には神界や仏界の写された世界があつて、そこで靈界の神仏を見ることになるので、彼はそれを本物の神や仏だと思つてしまう。こうした錯覚に陥つた者のミタマが割れることはまれである。

それでも彼が正しい求道心を持つていて、自分のかわつている世界に疑問を抱き、真の意味でミタマを開こうと努力したとしよう。そのとき彼は、低次元で開いている超感覚のために、今度は逆に大変なまどわかしを受けることになってしまう。人間が靈界次元を突破してミタマを開くことは、魔物のもつとも嫌うところであつて、そちらからの妨害干渉を強烈に受けることになる。そのとき彼は回路が開いているために、かえつて恐ろしい経験をしなければならなくなる。それこそ自分の命を捨てる覚悟をしないと、靈界の壁を突破することはできなくなるのである。その意味では超能力などないほうがよほど楽だし、迷わず進めるわけである。

さらに靈能力を持つている者が難行苦行の末に神界の門を開いたとした場合でも、彼の靈能力は失われることになるのである。靈界で通用したからといって、

それがそのまま神界に通用するわけではないからである。靈能に価値を見出し、それを失うのを恐れてなおさら神界に向かおうとはしなくなる。靈界次元で超能力を身につけた者が神界をめざす場合、彼は自分の超能力を捨てる覚悟をしなければならなくなる。しかし、たいがいの求道者はそうした自覚がないまま、靈界コースを根元へ向けて登っていくことになる。現代宗教のほとんどがこれである。

それではミタマをみがく求道者は、修行過程で現われてくる超感覚をどう扱えばいいのであろうか？ それにはしつかりとした目標を定めることが必要になってくる。根元界を目標にするのは、あまりにも距離が遠すぎて息切れするに決まっているので、そこへ行く前提として、まず神界に入ることを目標にしなければならぬ。しかも星の神界に向かう前に、地球神界にいる親神をめざすこと。この目標ですらもが仏界を越えているので、大変な課題であることは間違いない。そしてその目標を定めたら、そこに到達するまでは絶対に妥協しないことが重要である。神界をめざす正統派コースを行く者でも、ミタマが開く前に靈界次元で回路が開くことがあるし、それを拒絶してミタマが開いたとしても、ミタマが昇るレベルによって、天狗界や龍神界からの干渉を受ける。しかし神界レベルに到達するまでは、彼らにも妥協しないようにしなければならない。特に現世利

益を求めて彼らにすぎるべきではない。

家内安全、無病息災、商売繁盛、人生開運、靈能開発、そうした現世利益を求めないとしたら、いったい何のために苦しい思いをして修行をするのだろうか？ 現実生活で損をするようなことのために自分の人生をかけたり、命をかけたなどできるはずがない。信仰を求めるのは、不幸だったり、不運だったりする者が、神仏の力を借りてより良い人生を送れるようになるためのものである。もちろん一般レベルにおいてはそれでいいのだろう。しかし求道というものは、人間を捨てて神に向かう道であって、出発点ですでに一般レベルを抜け出すことを目標にしている。現世利益という人間世界の繁栄を願っていたのでは、人間を越えた世界など行けるはずがないのである。

靈界とは死んだ人間の行く世界である。あくまでも人間世界を越えているわけではない。その靈界とかわる靈能が開かれたからといって、それがそのままミタマの目覚めにつながるというのは、そうした意味からも言えることなのである。ミタマが目覚めて神に至るためには、人間にかかわる靈界を捨て去らなければならぬ。それは神仙界や仏界にも同様に言えることで、神界をめざす場合は、それらの世界も素通りしなくてはならないのである。もちろん神仙界なら神仙界、仏界なら仏界とのかかわりの深い求道者もあるわけで、それぞれの道筋を

とるほうが有利だという場合もある。そういう求道者は、自分の感覚に従って道を進めればいいのであって、神界コース以外はダメだと言っているわけではない。どのコースをとっても究極の根元界に到達できる道があるので、求道者は選びやすい道を行けばいいのである。しかし、その道筋の区別だけは自覚しておいたほうがよい。もつとも霊界コースでは、それらが交ぜ合わさって混沌としているので、区別はつけられないかもしれないが……。

それはともかく筆者の説く神界コースは、そうした区別が明瞭に自覚できなければ、めざす神界へは到達できないと断言できる。しかし、その区別が感じられるようになるのは、ミタマが開かないとなかなか難しい。ということは霊界を卒業しないことには、神界コースは見えてこないということにもなってしまう。そして、この霊界を越えるということは、超能力開発をめざしてする修行では達成できない。それどころか超能力願望は、かえってミタマを開くさまたげになる、そう言っても過言ではない。

求道とは、あくまでもミタマをみがいて神界に入ることが目標であって、神通力を得ることが目的ではない。神界をめざす者が超能力を求めて修行すると、ミタマが開く前に霊界次元で回路が開いてしまう。このことは神界行にとつては、害になることのほうが多いのである。異次元との回路が開くと、その珍しさに引

かれてどうしてもその世界にとらわれる。靈界なら靈界にとらわれると、その世界とのかかわりがどんどん大きくなり、神界へ向かう求道者はその足を引っぱられて、進行が大幅に遅れてしまう。だから靈界で回路が開いた場合でも、むしろその回路を遮断するぐらいの意志が必要なのである。そのためにも神界をめざすというゆるぎのない情熱が、求道者には要求されることになる。

超能力の発現も望めないとすれば、求道の喜びなどないではないかと言われるかもしれない。確かにこの道は厳しいわりには味気ない道である。現世的な喜びを捨てることが要求されるからである。一般に神というものは、人間に幸せをもたらしてくれるものとして考えられていて、人々は神社で、乞食すらも満足しないような小銭を投げ込んで、身に過ぎた願いごとをしてやむことがない。そして神社に勤める神職も、自分の生活を守るために、神というものは人間に御利益を与えてくれるものだという宣伝をすることに一生懸命で、祭神と直接交渉して神の意志を人々に取り次ぐという、真の意味での神主の役目などには見向きもしないのが現状である。

神道もここまで落ちるとその形式はもぬけのからに等しいが、由緒正しい神社に行くとき、神界の神は間違いないその社に住まっておられることが確認できる。にもかかわらず人々は、その祭神との直接交渉を求めるともなく、捨て金を投

げつけてはとてつもない願いごとを繰り返す。たとえば、人間が他人から一円玉や五円玉をほうられて、金がほしいとか、病気を治してくれとか、いい学校に入ってくれとか、好き勝手な要求を出されたとしたら、どんな気がするだろうか？ 馬鹿にするなど怒りだすのではあるまいか。現に筆者は、祭神から乞食銭などいらないと言われたことがある。

金は人間には必要だが神には無用なものであって、金を払うから神が動くわけではない。人間世界に神を降ろすにはそれなりの手順があつて、資金もかかる。その意味で神に仕える者に資金協力をすることは、神の良しとするところである。しかし神が人間に要求するのは、その心であつて金ではない。真に願う心、真に求める心、心底神を信じる心、祈る心、そうしただけがれのない純真な心がなければ、その願いは神には届かない。神が耳を傾けるほどの純真な心を得るために、求道者はミタマをみがくのである。

ミタマがみがかれて光を発するようにならなくては、神との交流はとてもできないし、願いごともなく届くものではない。だから現世利益を求める者は、神という次元の高い存在ではなく、もつと身近で効果のある霊界の神や先祖を大切にし、願いごとをそちらにすることになる。現世利益は神界の神にするよりも、霊界さんにするほうが簡単だし、実効もある。だから霊界宗教は繁盛するの

である。

しかし、真の求道者が霊界宗教に満足するはずはない。現世利益の喜びのない求道生活などとてもできないという人は、世間における各分野のそれぞれの道を、究極までとことん追求すればよい。たとえば芸道、たとえば武道、あるいは学問。そのほか商売の道などをとことん貫いて、その道の達人と呼ばれるまでに道を極めたら、その心の在り方の正しい者には神が働きかける。すべての道は神から発生しているからである。それを貫くことは神へ至る道でもある。これなどは現世利益のともなつた道、人間社会を肯定的にとらえて追求していく神の道である。これを術界（技能界）コースと呼ぶ。

しかし、本書で説く道はそういう道とはまた違う。純粹に神を求めてミタマをみがき、そして神に至ろうとする道である。この道はけわしいが、人間が神へと進化する道が、それほど容易であるはずはない。神に対する強いあこがれ、何を犠牲にしてもこの道を貫くという覚悟がなくては、通りきれない道である。

それでは求道者は何のために神になるのであるのか？ 苦しい思いをすることしかない求道生活を、何のためにするのであるのか？ 人を救うため？ 人間の魂を導くため？ 自己完成をめざすため？ 世界を整えるため？ 人類の進化をはかるため？ ……それは人それぞれ、与えられた課題、役目によって違いはあ

るうが、ミタマが成長し、輝いて神界の神々との交流が可能になったとき、求道者は、人間世界では味わえない至福の喜びと、その道を行くことの満足感を得ることになる。それは超能力を得ることなどは比較にならないほどの充足感と、生きがいの感じられるものである。そしてそれは、霊界を卒業して神界の門が開いたとき、つまりミタマの種が割れたときから、その確かな手応えが感じられはじめの性質のものだ、ということも言っておこう。たとえ妨害に悩まされ、障害物の高さに溜息がでるようなときにあっても、それは心の底からフツフツとわきあがって、その道突き進む勇氣と情熱を与えてくれるものであることは間違いない。

そして、求道者はやがて自分が地球人類の生存を支え、地球世界を保つ一員として生きていることに気づくようになる。その実感は、いかなる現世利益にもまさるものであることを、そのとき彼は確認することになるだろう。それが神の道というものである。